童謡詩人 金子みすゞの生涯をめぐる臨床心理学的一考察

ーアイデンティティの観点からー

林　智 一
(香川大学医学部臨床心理学科)

目的と方法

金子みすゞ（以下、みすゞと記す）は、『大漁』や『私と小鳥と鈴と』、『こだまでしょうか』などで知られる大正から昭和初期に活躍した童謡詩人である。1903年、山口県仙崎に生まれ、1930年、26歳で自死している。生前の出版活動は『童話』誌の読者投稿欄などわずかであったが、矢崎節夫の尽力によって1984年に全集が出版されて以来、教科書に掲載されるなど広く知られるようになる。本研究では、病跡学の研究を紹介し、あらたにアイデンティティという観点から、みすゞの生涯と自死について検討することを目的とした。

結果と考察

1. みすゞの生涯

矢崎（1993）と今野（2007）をもとに、みすゞの生涯を年表にした（Table 1）。みすゞの弟正祐は1歳で母ミチの妹フジが嫁した上山家の養子となる。フジの死後、ミチが松蔵と再婚するなど、複雑な家族関係となる。上山家では、養子であることを知らせないよう、上山文英堂で働くようになったみすゞに、正祐を「ぼっちゃん」と呼ばせた。その後、松蔵らの勧めで有能な店員であった夫と結婚、出産するが、夫から移された病気のため、病床に伏す。童謡ブームも終焉し、遺稿集の清書と、幼い我が子の言葉を採録する『南京玉』を始める。やがて離婚に至ったが、元夫が子を引き取りに来る日に、芥川龍之介と同じカルモチンにより自死する。母親が養育権を得ることは困難な時代であったが、子は母ミチにより養育された。

Table 1
金子みすゞ年表

年	主な出来事	詩作
1903	山口県大津郡仙崎村に生まれる	
1906	父が清国営口で死去	金子家、金子文英堂を営む
1907	弟が上山松蔵・フジ（母の妹）夫妻の養子に	
1919	前年にフジが亡くなり、母ミチが松蔵と再婚	
1923	母のいる下関の上山文英堂の支店で働く	童謡を書き投稿を始める 1924 年頃が詩作の最盛期
1926	結婚、出産	『日本童謡集』に作品掲載
1928	夫より詩作を禁じられる	
1929	病の床につく	3 冊の遺稿集清書我が子の言葉を採録する『南京玉』を書き始める
1930	離婚、自死	

2. 病跡学から見たみすゞ

渡辺（1997）、野嵜（2012）は、みすゞを schizoid 気質とし、福田（2011）は内向性を、窪寺（2022）は自己愛パーソナリティ傾向を指摘した。深い抑うつが指摘される一方（渡辺, 2011; 窪寺, 2022）、うつ病やパーソナリティ障害を否定する意見もあるなど（野嵜, 2012）、必ずしも一貫していない。

3. 2つのアイデンティティの統合という観点から

岡本（1997）は、成人期のアイデンティティ発達について「個としてのアイデンティティ」と「関係性に基づくアイデンティティ」の2つの軸を想定している。みすゞにおいては、詩人であろうとすることが個としてのアイデンティティ、良き娘、妻、母であろうとすることが関係性に基づくアイデンティティであると考えられる。

『私と小鳥と鈴と』の結句、「みんなちがって、みんないい。」は、「閨秀の童謡詩人が皆無の今日」（西條, 1923）と言われた時代に、詩人を志す自身が当時の常識的な女性像からは逸脱した存在であることを認め、詩人としてのアイデンティティを自己肯定するもののように思われる。一方、周囲の勧めによる結婚や夫の厳命による創作の放棄は、「みすゞの優しさであると同時に心の弱さを示すもの」（渡辺, 1997）とも受け取れる。

詩人であり母であるという2つのアイデンティティを統合するものが『南京玉』であった。だが、「ものうき事多く」なり（矢崎, 1993）、両者の統合は破綻する。そして、我が子の養育権を、自死をもって守ることとなる。そこには、詩人として死ぬと同時に、母として娘を生かし、遺言により養育権を守るという死後のアイデンティティ、すなわち「死後にどんなふうに思い出してもらうか」（Erikson, et. al., 1986 朝長ら訳, 1990）という形でのアイデンティティ統合があると思われる。